

愛宕山百韻を読み解く（四）

伊藤浩睦

今でもこの愛宕山百韻の発句に関しては、多様な論争があり、「ときは今天が下しる五月哉」は、光秀の挙兵の決意表明ではないと主張する人もいます。

当時の一級資料である太田牛一の『信長公記』に「ときは今天が下なる五月哉」と書かれており、これだと天下を知るとはならないので決意表明ではないとする人がいるかと思えば、これは「天が下しる」をあとで「下なる」と書き換えた痕跡があり元の句は「下しる」であったのだから決意表明であるとする人もあり、「下しる」が誤伝であることに気が付いて太田牛一が「下なる」と書き直したのなら「下なる」が正しくてこの発句は決意表明ではなかったと主張するといった具合で、いつまでもあれこれ言われています。「下しる」となっている写本もある一方で、『信長公記』は「下なる」なので、字句を巡っての議論は容易に決着しません。

しかし、連歌の約束事に従って全体を見てみると、第三で花が出たのはどう考えても異様です。発句が挙兵を暗喩していなければ、里村紹巴はこんな無理な第三を作る必要はありません。もともと第三は場面転換の役割も持っていますから、無季の句に軽く転換すれば良いので、「花落つる」などという縁起の悪い言葉を目出度い奉納連歌の第三で詠む必要などなく、初折全体の流れをぶっ壊すような第三になるはずがないのです。里村紹巴は間違いなく明智光秀の決意表明を理解していたと考えるべきです。

本能寺で織田信長を討ち取った明智光秀は、山崎の合戦で羽柴秀吉に敗れ、小栗栖の明智藪で落武者狩りに遭って亡くなりますが、その後この愛宕山百韻が政治問題化します。新たな天下人になった羽柴秀吉は、里村紹巴に対して、「お前は連歌があった五月二十四日の時点で明智の謀反を知っていたのではないか。どうしてそれを信長様に知らせなかったのだ」と紹巴を追求します。二十五日に

紹巴が信長に知らせていれば、信長は安土城から出て来なくて光秀の謀反は失敗に終わったはずです。その点から言えば紹巴は信長を裏切っているのです。

その時点で紹巴は知らなかったことを立証するために、「下しる」を「下なる」と書き換えたのではないかと思われます。それでも秀吉が連歌の約束事に詳しく、
「だったらどうしてこんな第三を作った。発句の暗喩を知らなければ第三に花が来るはずがない」と追求したのでしょうか、漢字も書けなかった秀吉が連歌の構造など知るはずもなく、紹巴の言い訳は通ります。秀吉にしてみれば信長が死んでくれたお陰で自分が天下人になれたわけで、紹巴が知らせなかったことは秀吉に大きな利益をもたらしました。紹巴に対する追求は世間向けのもので、尤もらしい言い訳があればそれで良かったのです。

紹巴は、秀吉の天下になっても連歌師として世の中に立っており、秀吉に連歌も教えます。しかし、基礎的な教養のない秀吉の連歌はものにならず、滑稽好きの秀吉が無茶振りの前句を言うと、それに機知の句を付けるといったことをやって機嫌を取り結んでいました。連歌師とはそういう存在でした。その点では後の俳諧師と変わりません。短詩文芸で生計を立てるといふのはこのようなことなのです。 完